

露萩

泉鏡花

青空文庫

「これは禎まきさん入いらつしやい。」

「今晚は——大した景気ですね。」

「お化ばけに景気も妙ですが、おもいのほか人が集りましたよ。」

最近の事である。……今夜の怪談会の幹事の一人に、白尾しろおと云うのが知己だから禎を別間に迎えながら、

「かねがね聞いております。何時いつも、この会を催しますのに、故わざとらしく、凄味、不気味の趣向をしますと、病人が出来たり、怪我があつたりすると言います——また全くらしゅうございますからね。蒟こん蒟やくを廊下へ敷いたり、生大根の片腕を紅殻で落したり、芋ずい※で蛇を振より下げたり、一切そんな悪いたずら戯わらはしない事にしたんですよ。ですが、婦人だけでも随分の人数にんずです。中には怪談を聞く人でなくて、見るつもりで来ているのも少からずと言つた形ですから、唯ほんの景ぶつ、口上ばかりに、植込ひきこを向うへ引込んだ離座敷ちよつに、一寸看板を出しました——百もの語がたりにはつきものですが、あとで、一人ずつ順そこに其処へ行って、記念の署名をと云つた都合なんで、勿論もちろん、夜が更けましてから……」

——この時もう十一時を過ぎていた。植真三が、旅館兼料理屋の、この郊外の緑軒みどりけん

を志して、便宜で電車を下りた時は、真夏だと言うのに、もう四辺あたりが寂寞ひっそりしていたのであつた。

「……尤ももつと、行儀よく一人ずつ行くのではありません。いずれ乱脈でしようから、いまのうち凄こわい処——ははは、凄くもありますまいが、ひとつ御覧なすつて、何どうぞまた、何かと御注意、御助言を下さいまし。」

「御注意も何もありませんが、拝見をさして頂きましょう」

「さ、何なんうぞ此方こちらへ。」

——後で芳町よしちようのだと聞いた、若い芸妓げいしやが二人、馴染なじみで給仕をして、いま頃夕飯を、……ちようど茶をつがせて箸を置いた。何なんう見ても化ものには縁の遠そうな幹事の白尾が、ここで立つと、「あら、兄さん、私も。」「私も。」と取りつくのを、「お前まへさんたちはあとにおし。」で、袖を突いて、幹事室を出るのに、真三は続いた。

催もよおしはまだはじまっていない。客は会場の広室ひろまに溢れ、帳場にこぼれ、廊下に流れて、わやわやとざわめく中を、よけるようにして通つて、一つ折曲る処で、家内総出で折詰の支度こころに料理場、台所を取乱したのを視みながら、また一つ細く成る廊下を縫うと、其処にも、此処こゝにも、二三人、四五人ずつは男、女が往來ゆきかう、彳たたずむ。何なんしろ暑いので、誰たれも吹ぬけの

縁を慕うのであった。

「では、此処から庭へ——」

「あれですか。」

真三は、この料亭へは初めてだったし、夜である。何の樹とも知らないが、これが呼びものの、門もんぐち口に森を控えて、庭しげりの茂は暗いまで、星に濃く、燈あかりに青く、白露しらつゆに艶つやかである。その幹深く枝々を透すかして、ぼーッと煤色すすに浸にじんだ燈は、影のように障子を映して、其処あんどうに行燈ともしの灯れたのが遠くから認められた。

二枚か、四枚か。……半ばは葉の陰にかくれたが、亭ちんこのみの茶座敷らしい。障子を一枚細目に開けてあるのが、縦に黒く見えて、薄すすきか、蘆あしか揺ぐにつれて、この催とて、思ひなしか、長く髪の毛の動くような色が添った。

「下駄があります、薄暗うございますから。」

「やあ、きみじゃったな、……先刻さつきのは。——」

縁のすぐ傍わきに居て、ぐるりと毛脛けすねを捲まくったなりで、真三に声を掛けたものがある。言ことばついで、軍人の猛者もさか、田舎出の紳士かと思われるが、そうでない。赭あから顔で一分刈の大坊主、六十近いが、でつぷり膏あぶらぶとり肥あかがしたのに酒気をさえ帯びている。講中そうちなんぞの揃そろら

しい、目に立つ浴衣ゆかたに、萌葱博多もえぎの幅狭な帯はばげまをちよつきり結びで、二つ提げ淀屋よどやこのみの煙草入をぶらつかせ、はだけにはだけた胸から襟へ、少々誇張だけれど、嬰児あかんぼの拳こぶしほどある、木の実だか、貝殻だか、赤く塗った大粒を、ごつごつごつと、素ばらしい珠数じゆずを掛けた。まくり手には、鉄の如意にょいかと思う、……しかも握にぎりぶと太おにして、丈一尺たけばかりの木棍ぼくこんを、異様に削りまわした——憚はばかりなく申すことを許さるるならば、髻ぼうふつ髻ふつとして、陽よ形うけいなるを構えている。

——槇真三は、ここへ来る、停車場を下りた処で、実は一度、この大坊主に出会った。居処いどころは違つたらしいが、おなじ電車から、一步おくれて、のっしのっしと出たのである。——馴切なれきつた、土地の人らしいのが三四人、おりると直ぐに散つたほかは、おなじ向きに緑軒へ志すらしいものの影も見えなかつた。思いのほかで。……夜あかしだと聞く怪談には、この時刻ときが出盛りでぎかで、村祭むらまつりの賑なわてぐらいは人足ひとあしが落合うだろう。俣くもも並んでいるだろう、……は大あて違い。ただの一台も見当らない。前の広場も暗かつた。

改札口を出たままで、人に聞かぬと、東西を心得ぬ、立淀たちよどんで猶たぬら予う処へ、頭あたまわれたのが大坊主で、

「やあ、君。」

と、陣笠なりの汚れくさったパナマを仰向けて、

「緑軒の連れんじゅう中ちゅうじやあないかな——俺も此処ははじめでだ。乗った電車から戻り気味に、逆に踏切を一つ越すツてこツたで、構わずその方角へ遣やっつけよう。……半分寝ている煙草屋なんぞで道を訊くのもごうはらだからな。」

真三は連立った。

「化ものの会じやあねえか、気のきかねえ。人魂でも白張提灯しらはりぢようちんでも、ふわりふわり出迎いえに来れば可いい。誰だと思いう、べらぼうめ。はツはツはツ。」

最もう微醉ほろよのいい機嫌で、

「——俺は浅草の棍元教こんげんきやうと言いう、新あらたに教おしえを立たてた宗門せんだんの先達せんだつだよ。……あとで一説ひと法は勿はねかすが。——何いせい、この一喝いっかつを啖くらわすから、出いて来きた処ところで人魂ひとたまも白張しらはりも、ぼしやぼしやは、ぼしやぼしやだ。」

と、そいつが斑剥まだらはげだが真赤ましかに朱しゆで塗ぬつてある——件くだんの木棍木のひらで掌てのひらをドカンと敲たたいた。

真三は、この膏濃こうのうい入道いどうは、処ところも、浅草せんそうだと言いう……むかしの志道軒しどうけんとかの流ながれを汲ひむ、慢心まんしんした講釈家こうしゃかかなんぞであらうと思いつた。

会場かいじやうへ着きいて、帳場ちやうぢやうまでは一いっしよ所ところだつたが、居合いあせたこの幹事かんじに誘いわれて、そして彼は

別室へ。

「ええ、先刻は……彼処あそこに、一寸した、つくりものがあるんだそうです。」

「うむ、御趣向かい。見ものだろう。見ぶつするかな。……わい。」

どしんと縁へ尻餅を搗ついた。

「苔すべが、すべに。庭下駄の端緒はなおが切れていやあがる。危えじゃねえか。や、ほかに履きものはがあせんな。はてね。」

「お気をつけなさいまし。」

それなり行こうとした幹事の白尾を、脛すねを投出したまま呼留めた。

「気をつけねえじやいらねえや——もし、徽章きしょうを着けていなさるからには世話人だね、肝煎きもしりだね。この百二三十も頭数のある処へ、庭へ上り下りをするなり、その拵こしらえものを見に行くなりに、お前さんたちが穿はいて二足、緒の切れた奴が一足、たった三足。……何、二足片足しかねえと云うのは何う云う理合りあいのもんだね。」

「何うも相済みません。ですが、唯今は、ほんのこれは内々ないないの下見なので。……後に御披露の上、皆さんにおいでを願う筈に成っています。しかし、それとても、五人十人御一

所では……甚だ幼稚な考えかも知れませんが、何の凄味も、おもしろみもありません。……お一人、せいぜいお二人ぐらいずつと思ひまして、はきものの数は用意をしません。庭を御散歩なさいますなら、下足をお取りに成つて……御自由に。——」

「あら、一人ずつで行くの、可恐いわね。」

と、傍かたえぎきして、連つれらしいのに、そう云つた頸えりの白い女がある。

「何が可恐いものか。へん、俺がついてる。」

その連でもないのに、坊主は腕まくりをして、陽木棍で膝を敲いて出しや張ばつた。

「坊主、一言いちごんもありませんな。」

植込を低う抜けながら、真三が言つた。その植込が、いまの弁解いひとぎを聞くまでは、おなじく、この人数にんずに、はきもののその数は、と思つたのださうである。

処が、

「いいえ、出たらめに遣ツつけましたがね、……ハツと思ひましたよ。まったくの処不行届きだつたんです。……あれではとても足りません。何てツたつて、どうせ大勢でしょうから、大急ぎで草履でも買わせて間に合せる事にしなければなりませんまい。」

——で、後にその草履の用意は出来た。変化へんげ、妖怪、幽霊、怨念の夜だからと言って、

そのためすそに裾、足の事にこだわるのではないのだが、夜半よなかに、はきものの数さえ多ければ、何事もなかつたろう。……たにんず多人数が一所だから。処ところが、庭はじとじとしている。秋立あきたつて七日なぬかあまりも過ぎたから、夜露も深い。……人の出あしは留とどめなかつたが、日暮方、町には薄い夕立があつた、それがこの辺はどしや降りに降つたと言う。停車場からの窪地は道を拾うほど濡ぬれていた。しかも植込の下である。草履は履く時からべつとりして、踏出すとぐつしよりに成る。納涼もよおしがてらの催もよおしだが、遠出をかけて、かえりは夜があけるのだから、いずれも相応めかしていて、羽織、足袋たびばき穿が多かつた。またその足袋を脱ぐのが、怪しい仕掛りようがあると云う、寮りよう構がまえへ踏込むのに、人住まぬ空屋以上に不気味だから、無造作に草履わらじばきでは下立おりたたないで、余程ものずきなのが、下駄のあくのを待つて一人、二人ずつでない、怪しい席へ入らなかつた、——そのために事が起つたのである。

さて、濡縁ぬ縁なりで、じかに障子を、その細目にあけた処へ、裾がこぼれて、袖垣そでがきの糸いと薄とすすきにかかるばかり、四畳半一杯の古蚊帳ふるがやである。

「……ゆきかえりに、潜らせようツてつもりですが、まあ、あとで中を御覧なさい。」
そう言つて、幹事の白尾は、さらさらと蚊帳を押しながら、壁を背高く摺すつて、次の室へ抜けて行く。……続くと、一いっしよく燭の電燈、——これも行燈にしたかつたと言う——朦も

臙うろろとして、茄子の牛うずくまが踞すつたような耳みみ盥だらが黒く一つ、真中に。……青く錆びたわらしを掛けて、鉄漿壺おはぐろつぼを載せ、羽毛楊枝はねようじが渡してある。……横よこ斜ななめに、立枠の台に、円まる形の姿見を据えた。壺には念入りに鉄漿を充みたしてあるので、極熱ごくねつの気に蒸れて、かびたような、すえたような臭気においが湧く。

「巫女いちこの言いぐさではありませんが、（からのかがみ）と云った方が、真個ほんとうは、ここに配う合つりが可よいのですが、探した処で磨とがないでは、それだと顔がうつりません。——いろいろ凄しみい話を聞いて、ここへ来て、ひよいと覗く。……こう映ると……」

首を伸ばした白尾に釣られて、斉ひとしく伸ばした頸えりを、思わず引込めて真三は縮まった。「我ながら気味が悪かろうと言ったつもりなんです。……真夜中の事ですからね。——その窓際の机に向つて署名となると、是非ここが氣に成るように斜はす違ちがひに立てました。——帳面しょうめんがございます。葬礼ひかえの控ひかえのように逆さかさじなどと言う悪あくはしてありませんから、何なら、初筆しよふでを一つ……」

「いや、いずれ。」

と云つて、真三は立つて覗いた。丸窓の小障子は外れていて、外に竹藪のある中に、ハアト形うろこなりにどんよりと、あだ蒼い影が、ねばねばと、鱗うろこ形なりに溶とけそうに脈を打つて光つ

ている。

「仕掛ものですよ。」

「蒟蒻。」

「いえ、生鳥賊で。」

いきれにいきれて、腥く、暖くプンと臭つて来る。おはぐろのともつれ合つて、何とも言えない。……それで吐き戻したものがあつた。――

床の間には、写で見て知つている、応挙の美女の幽霊が、おなじく写して掛つていた。これは、長崎の廓で、京から稚い時かどわかされた娘に、癩の死際に逢つて、応挙があわれな面影を、ただそのままに写生したと言う伝説の添つた絵なのである。目のきれの長い、まつげの濃い、下ぶくれの優しい顔が、かりそめに伝うる幽霊のように、脱落骨立などとしてゐるのでない。心もちほどは寡れたが卵の毛ほどの疵もなく、肩に乱れた黒髪をその卵の花の白く分けて、寂しそうにうつとりして、しごき帯の結びめの堆いの、却つて肌のかぼそさがあらわれて、乳のあたりはふつくりと艶である。大きく描いて、半身で、何にもなしにつつと、軸の宙で消えている。

香炉に線香を立てて、床に短刀が一口あつた。

「魔よけだと申しますから、かたがた。……では蚊帳の中を一つ。……あとでは隔へ襖を
入れますつもりです。」

敷居からすぐに潜つたが、唯、見る目も涼しく、桔梗の藍が露に浮く、女郎花に影
がさす、秋草模様の縮緬をふわりと掛けて、白のシイツを柔に敷いた。桃色の小枕ふ
つくりと媚かしいのに、白々と塔婆が一基（釈玉）——とだけ薄りと読まれるのを、
面影に露呈に枕させた。頭に捌いて、字にはらはらと黒髪は、髻を三房ばかり房りと合せ
たのである。ぬしありやまた新に調えたか、それは知らない、ただ黒髪の気をうけて、枕
紙の真新しいのに、ずるずると女の油が浸んでいた。

「あの行燈には苦心しました。第一、金が出ています。」
と笑いながら、

「古さと言ひ、煤け工合、鼠の巢のようなぼろぼろの破れ加減を御覧下さい。……四谷怪
談にも使うのを、そのまままで小道具から借出しました。浅草でしてね。俳優の男衆
が運んだんですが、市電にも省線にも、まさか此奴は持込めません。——ずうと俵で通し
ですよ。」

「自動車も大袈裟となりますと、持ものに依つては、電車では気がさしますし、そうなる

と俾です。……」

と、ふと、もの思う状さまに、うっかりした様子で真三が言った。

「私も、——昨年ですが、塔婆を持って、遠道とおみちを乗った事があるんです。……」

「へい、貴方あなたが塔婆を……」

と、古行燈の目を移して、槇の顔と枕を見た。視みたが、

「おや、塔婆が真白だ。」

と、熟じつと白尾が瞳を寄せ、頬を摺るばかりおかしく傾いて鼻できいて、

「白粉おしろいだ。——誰か悪戯に塗つたと見えます。ちよツ馬鹿な……御覧なさい、薄化粧で

すぜ。この様子じゃ、——信女しんにょ……とある処へ、紅べにをさしたかも知れません。」

「はあ、この塔婆は、婦人のですか。」

問う声も何となくぼんやりする。そのわけで……枕の色も、閨ねやの姿も、これは、
一いちじよ

定うさもあるべきを、うかうか聞くのであつたから。

「勿論です——何処か、近まわりの墓地から都合をするように、私たちで、此家ここのうちへ頼んだんですが、それには、はなから婦人のをと云う註ちゅうもん文もんでしたよ。」

さらぬだに、魔の行燈と、怨霊の灯と、蚊帳の色に、鬱うつし沈んだ真三の顔を、ふと窺い

つつ、

「尤も、無縁なのを、……それに、成りたけ、折れたか、損じたかしたのをと逃えたいです。——見ましたがね、この塔婆は、随分雨露に曝さらされたと見えて、半分に折れていました。……」

「で、婦人だと分りましたか。」

「たしか確です、（信女——）尤も、ささくれてはいましたが。——何か、貴方？……」

「いいえ。」

と、ややはずきりして、

「何でもありません……唯、此処へ来ます道に、線路の踏切がありましよう。……停車場こちらから此方は、途中真暗でした。あの踏切のさきの処に、一軒氷屋がまだ寝ないでいましたが、水提灯が一つ、暗くついただけ、暖簾のれんは掛かばなしで、誰も人は居ないので。檐のきした下したに、白と茶の大きな斑ふちいぬ犬いぬが一頭ひとつ、ぐたりと寝ていました。——あの大坊主と道づれでしたが。……彼奴あいつ、あの調子だから、遠慮なしに店口で喚ねほけいて、寝惚ねぼけ声こえをした女に方角をききましたつけ。——出かかると、寝ていた犬がのそりと起きて、来かかる先へ、のすんです。——私は大嫌だいきらひですがね——（犬が道案内をするぞ、大先達の威力はどうだ。）

ツて坊主は得意でいました。踏切がこんもりと、草の中に乾いた川のように、こう高く土手を築いた処で、その、不性ぶしょうたらしい斑まだらが、急に背筋うねに畝うねを打って狂って飛上るんです。何だか銜くわえて、がりがり嚙りながら狂うんですよ。越すのに邪魔だから、畜生畜生！……嗚鳴どなると、急にのろりとして、のさのさと伸びた草の中へ潜りました。あとにその銜くわえたものが落ちています。——（宝ものかと思えば、何だ、塔婆の折おれ端つばしを。）一度拾ったのを、そう言つて、坊主が投出す——ああ、草の中へでも隠したら、と私が思ううちに、向うへ投ほうつたもんですから、斑犬まだらいぬがぬいと出て、引銜ひつくわえると、ふツと駈けて、踏切むこうへ。……もう氷屋の灯の届かない処へ消えたんですが。（何の塔婆ぐらい。……犬に骨を食くわせるも悟さとだぜ。——また説いて聞かせよう。……だが、見ねえな、よみじ見たいな暗がりの路を、塔婆の折おれを銜くわえた処は犬の身骸からだが半分人間に成つたようだ。三世相さんぜそうじやあねえ、よく地獄の絵にある奴だ。白斑しろまだらの四足で、面つらが人間よ。中でも婦おんなのは変な気味合あだ。轆轤ろくろくび首くびは処女しんぞだが、畜生道は、得て眉毛まみえをおとしたのつぺりした年増としぞうだもんだな、業ごうざい曬さらしな。……私は可厭いやな心持で、聞かない振ふりをして黙りこくつて連立つて来たんですが——この塔婆も、折れたんだとお話しですから、ふと……何だか、踏切の、あの半分じゃあないかと云うような気がするんです。」

「怪談怪談。」

幹事は陽気に軽く手を拍つて、

「そのお話を、是非一つ、会場の広間で願ひましょう。少々、蛇体を加えて、ここに胴から上、踏切の尾の方と言うような事になれば実ものです。ねえ、楨さん。」

塔婆が青い。びくびくと蚊帳が揺れた。

「ええ、飛んでもない。」

「何、そのかわり楽屋では何でもない事——幾らもあります事です。第一この塔婆だって、束にして、麩朶そだ、枯葉かれつばと一所に、位牌堂うらの壁際に突込んであったなかから、（信女）をあてに引抜いて来たツてね、下足の若い衆しゅが言っていました。折れたのも挫ひしげたのも、いくらも散らかっているんですよ。」

真三は、それでも引入れられそうに黙つたが、

「——（釈玉——）とだけ、あとは、白い撫子なでしこを含んだように友染の襟にかくれていますが、あなたは、そのあとを御存じでしょうかしら。」

「……見ました、下は、……香——です。——（釈玉香信女）です。確たしかに、……何ですか、一つまくつてお目にかかるとしますかね。」

真三は、手を圧おさえるように犍ひしと留とめた。

「串じょうだん戲ぎにも、女にょの字じへ、紅べにをつけたろうなぞッてお話わでした。塔婆たつぱは包かんでありませ
ん。婦人ふじんの裸はだかもおなじです。」

幹事かんじは、世情せじやうに通とじて、もの分わつた人ひとである。

「ああ、よくお留とめ下くださいました。——決してこの蒲団ふとんはまくりませぬ。——が、何か、
貴方あなた、お気きになさる事ことがあるんですか。」

「さあ、いいえ。」

「が、それでも。」

「戒名かいなに、一寸いっしゆん似たのがあるんでしてね。」

「いや、それは。それならお気きになさいますな、なさらぬが可ようございます。この宗門しゆもんの
戒名かいなには、おなじのがふんだんですよ。……特ことに女にょのは、こう云いう処ところで申ましては如何いかだけ
れど、現いまに私わたしの家内けいだいの母ははと祖母そぼとは戒名かいながおなじです。坊さん何なにを慌あわてたんだか、おまけ
にそれが、……式亭しきてい三馬さんばの浮世床うきどの中にあります。八百屋やちやくのお柚ゆずの（釈縁しやくえん応信おうしん女にょ。）——
——喧嘩けんかにもならず、こまっちまいます。」

寂さびしい声こゑだが、二人ふたりで笑わらった。

「さ、その気であちらへ参りましようか。」

「いずれくわ悉くわしいお話を。」

「あ、蚊帳から何か出ましたかね。」

真三はゾツとした。が、何にも見えない。

「……小さな影法師のようなものが。」

「私たちの影でしょう。」

と、行燈の左右に立って、思わず四辺あたりがみまわされた。

「槇さん。」

「は、」

「あなたは、おはぐろの煮える音は御存じでありますまいね。お互に時代が違いますが、何ですか、それ、じ、じ、じ……」

「虫ですかしら……油が煮えるのでしよう。」

幹事は耳を澄したが、

「いえ、行燈の灯は動きません。……はてな、おはぐろを嘗なめる音かしらん。」

「……………」

「それもお互に知りませんな——ああ、ひたひたと、何の音だか。」

「ああ。」

「あれだ。」

殆ど同時に声を合せた。次の六畳の真中の、耳みみだら盥らいから湧くように、ひらひらと黒い影が、鉄漿壺を上うえした下に二三度伝った。黒蜻蛉くろとんぼである。かねつけ蜻蛉が、ふわふわと、その時立ったが、蚊帳に、ひき誘われたようにふわりと寄ると、思いなしか、中なかすいて、塔婆に映つて、白粉おしろいをちらりと染めると、唇かと思えて、すつと糸を引くように、櫺子れんじの丸窓を竹深く消えたのである。

幽霊の掛軸は、直線を引いて並んだ。行燈の左右のこの二人の位置からは見えない。が、白い顔の動いたような氣勢けいはいがした。

「考えものです——発起人方、幹事連と、一応打合せて、いまの別亭はなれの事は誰にも言わずに、人の出入りをしないようにした方が可いいかとも思います。」

植込を返しながら、白尾がしんみりと葉の下に沈んで言った。

「……広間が暗くなっていますね、……最もう会をはじめました。お気をつけなすつて。…

…おお、光る……」

「いなびかり。」

「いいえ、樹の枝にぶらりぶらりと、女の乳を釣したように——可厭にあだ白く、それ、お頭の傍にも。」

「ええ。」

「あちらが暗くなると、ほかりほかり光り出すと言つて、……此家の料理方の才覚でしてね。矢張り生烏賊を、沢山にぶら下げましたよ。」

もとの縁側。それから廊下は明るかった。が、広間の暗くに吸込まれて、誰も居ない。そのこぼれた裾、肩が、女まじりに廊下に背ばかりで入乱れる。

料理場の前には、もう揃つた折詰の弁当が堆く、戸を圧して並んだが、そこへ幹事が通りかかるのを見ると、蔭から、腰掛を立て、印半纏の威勢のいいのが顔を出して、「白尾さん。この折詰を積んだ形が一番の棺桶などは、どんなものです。」

と手柄顔で言つた。幹事は苦笑をしたばかり。

処へ、ほんの唯五六人で、ぼとぼと沈めた拍手があつた。会の趣が趣であるから、故と遠慮をしたらしい。が、ちようど発起人を代表して、当夜の人気だつた一俳優が開会

の辞を陳べ終つた処であつた。

真三は幹事の白尾と行きがかりに立留つて、人々の背後から差覗いて、中を見た。十畳と八畳に、廻縁を取廻して、大い巳の字形に、襖を払つた、会場の広間は、蓮の田に葉を重ねたように一面で、暗夜に葉うらの白くほのめくのは浴衣である。うちわも扇も、ひらひらと動くのが見えて、僅に廊下から明りを取つた並居る人顔も、朧を震めて殆ど見分けのつかない真中処へ、トタンに首のない泥鼈の泳ぐが如く、不気味に浮上つたのは大坊主頭であつた。

「分つた、分つた。——それ、いま発起人の言つたとおり、御銘々話を頼むぜ。……妖怪、変化、狐狸、獺、鬼、天狗、魔ものの類、陰火、人魂、あやし火一切、生霊、死霊、幽霊、怨念、何でも構わねえ。順に其処へ顕わかせる。棍元教の大先達が、自在棒を押取つて控えたからには、掌をめぐらさず、立処に退治してくれる。ものと、しなに因つては、得脱成仏もさして遣る。……対手によつては、行方が手荒いぞ。」

と煙草盆をガンと敲いた。

「女小児は騒ぐなよ。如何なるものが顕われようとも、涼しい顔で澄しておれ。が、俺がこう構えたからには、芋虫くさい屁びり虫も顕われて出はすめえ。恐れをなすな。うむ、

恐れをなすな、棍元教の伝沢だ。」

「……もしもし。」

「大先達の伝沢だぞ。」

「もし、お先達。」

と俳優やくしやがすつきりと居直った。

「あなたのお気に入るか何うかは分りませんが、この会は、妖怪を退治たり幽霊を濟度するのが趣意ではありません。……むしろ、怪しいもの、可恐おそろしいものを取入れて、威おどすものには威され、崇るものには崇られ、怨むものには怨まれるほどの覚悟で、……あるべき事ではないのですが、ろくろ首でも、見越みこし入道でも、海坊主でも。」

ひやひやと低声こしこえで言ったものがある。

「ここへ頭かぶられるのを迎えたいと思うんですから、何うぞ、行力も法力も、お手柔かな所で願ねがいたいんです。」

今度は大勢で拍手した。この坊主、みな面つらが憎にくかったに相違ない。

「半分わかった。——さあ、はじめろ。……とに角かく何でも出ろやい、ばけもの出たところ勝負だ。」

と音を強く、ぐわんとまた煙草盆を木棍で敲いたのである。

もの争いがあつては、と中に立つらしい気構きがまえで、白尾は人をわけて座へ入った。

海岸らしい——話の様子で。——（避暑中の学生が、夜ふけて砂丘の根に一人、浪なみを見た目を大空の星に移していたが、渚をすらすらと通りかかる二人づれの女の褌つまに、忽ち視

線を海の方へ引戻された。月なき暗い夜に、羅うすものはだの膚が白く透く、島田鬣しまだと、ひさし髪と、

一人は水浅葱みずあさぎのうちわを、一人は銀地の扇子を、胸に袖につかつて通る。……浪がうつ

すと裾を慕つて、渚の砂が千鳥にあしあとを印おして行く。ゆく手に磯に引揚げた船があ

つた。ちようどその胴のあたりへ二人が立った。が、船底が高くつて、舷ふなばたは、その乳のあ

たりを劃しきつて見える）

一人、談者いちにん だんしゃの座にあつて恁かく語る。……この話を、楨が座に加わつて聞いたのは、

もう二時を過ぎた頃であつた。——先刻、白尾と別れてからは、何となく、気屈し、心が

鬱ふさするので、ひとりもとの幹事室へ歸つて、出来得るなら少しばらく時身体を横にもと思つたが、

ここも人数にんずで、そうも成らない。あの若い芸妓げいしやは、もう其処には居なかつた。それはそ

れで、懇意みじりごしなもの見知越みしりこなもの、いずれも広間へ出たらしく、居合したのは知らぬ顔ば

かりであつた。が、心易く言を掛けられるのに、さまで心も置けないで、幾らか胸は、開けたが、しかし、座に久しく成りすぎる。媚かしいのも居ただけに、そういつまでも妨ぐべきではあるまい。些と彼方へもお顔をと言われるにも、気がさして、われからすすむともなく廊下を押しされて、怪談の席へ連つた。人は居余るのだから、端近を求むるにたよりは可い。縁から片膝ずれるほどの処へ坐ると、お、お、と話中だから、低い声だが、前後に知合の居たのも嬉しくつて落着いた。時に聞いたのである。……前の筋道は分らない。(——渚の二人の女は舳を切るか、そこへは白浪が、ざあぎツとかかる。大方艦へ廻るであらう。砂丘つづきの草を踏んでと、学生が見ていると、立どまっていた二女が、ホホホと笑うと思うと、船の胴を舷から真二つに切つて、市松の帯も消えず、浪模様の裾をそのままに彼方へ抜けた。……) ——

恰もこの時であつた。居る処の縁を横にして、振返れば斜に向合う、そのまま居れば、背さがりに並ぶ位置に、帯も袖も、四五人の女づれ、中には、人いきれと、温気にぐつたりとしたのもある。その中から、こう俯向き加減に、ほんのりと艶の透く顔を向けて、幽かな衣の身動きで、真三に向直つた女があつた。

「あなた。」

「……………」

「槇さん。」

「あ、」

と云つたが、その姿は別の女の背と、また肩の間に、花弁はなびらを分けたようにはさまつて、膝も胸もかくれている。明石あかしの柳条しよまの肩のあたりが淡く映つた。

「今夜はよく入らっしゃいました。」

「は。」

もとより怪談中である。声あるだけに、ものいいは低かつた。が、またこの折には、あちらでも、こちらでも、ひそひそ話が泡沫あわぶくに成つて湧いたから、さまでに憚るでもなかつたので、はつきりと聞えたのである。が、誰だか分らぬ。思い当る誰もない。

「失礼ですが、つい…………誰方どなたですか——暗いので。」

「暗い方が結構です。お恥かしいんですもの。…………あなたには、まことにお心づけを頂きまして、一度、しみじみお礼を申しとう存じました。」

「…………失礼ですが、全く何うも…………」

「ええ、あの、私の方は、よく存じておりますんですよ。…………」

（——そうすると、二人の女が、船を抜けて、船を抜けてから、はじめて、その何とも言えない顔で、学生を振向いて、にこりと笑った。村の方では、遠吠の犬がびようびようと鳴くし、丑満うしみつの鐘。……）

「可厭いやですね、まあ、犬は可厭でございますこと。」

一層声が低かった。が、うつとりと優しい顔、顔、顔よりも、生際はえぎわがすすきりと髪かみの艶が目に立った。

「坊主も可厭ですわ。」

「何処に居ます。いま……」

「あ、あれ、かねつけ蜻蛉が飛びますの。」

この声こゝろがきこえたらう。女たちの顔が、ちらちらと乱れて、その瞳も、その髪あたまも、恰あたかも黒い羽のようにちらついた。ひらひらひらひら。

真三まさんにものを言いった女は、その中うちの誰であつたか、袖のいろいろに紛まれて、はらはらと散る香水と、とめとめきの薫かおりに紛まれたのである。

話わもちようどひとくぎり——齟そらしい。

とに角かく、きき取とつていたのが、一同に氣を放ち、肩かたを弛ゆるめて、死んだ風が渡るように汗

に萎えた身体は皆動いた。

「誰方か泣いていらつしやりやしませんか。泣いていらつしやりやしませんか。……御婦人のようですが。」

幹事白尾の声である。

「泣いていらつしやるようですね、——御気分の悪い方があるんじゃないやありませんか。」
泣いて、……泣いている……と囁く声が、ひそひそと立って、ふと留むと寂然とした。

「間違いでしたか——大丈夫ですね。……それでは誰方か、またお話を。」——
談者一人、脱いでいた薄羽織を引かけるのが影の如く窺われて、立って設けの座に直った。

再び、真三の右斜めの、女の肩と、女の胸との間へ、いまの美しい顔が見えた。

「私ですよ、泣いていますわ。」

濡々とおくれ毛が頬にかかるのが、ゾツとするまで冷く見えた。

「……………」

「坊主が可厭で……可厭で……私……」

「坊主、さ、何処に居ます。」

思わず膝を立てて、声を殺しながら、その女に差寄つて聞いたと思うと、

「え、坊主？……」

と振向いて聞返したのは、翡翠の珠も眉に近い、それは幹事室で見た先刻の芸妓であつた。——この連中が四五人居たので。中にいまのそれらしい面影は煙にも見えない。

「失礼しました。」

極りも悪し、摺り状に退つた。心は苛立つ、胸は騒ぐ。……

「坊主は何うしました。」

何うしました？ 坊主は、坊主は。——身近な処から顔見知の人たちに、真三は、うかうかと聞き廻る。……さあ、何処へ行きましたかと云う。今しがたその辺に見えたと云う。……何等の交渉のないのも居た。——坊主——坊主？——幾度も、煩く口を出したと云う。会の方から故障が出たと聞いたのに、たよりを得て、うろろうろ人なかを手さぐりで、漸と白尾を見て、囁いて聞くと、私たち三人がかりで片傍へ連出して、穩かに掛合つたので、何うにか静つて黙つたが、あの八ツ頭を倒に植えたような頭は、いま一寸見当らない、と真三とともに座中を透した。勿論、話手を妨げないように、幹事側とて、わけて、ひそひそ、ひそひそと、耳をつけ、頬を合せて、あつちへも、こつちへも、坊主は、坊主は——

真三に取つては、あの坊主が此処に居れば、幾らか気は安まったのである、が、見当らない。

坊主は、——坊主は——ああ、我ながら、いやな坊主を口で吐いて、広間じゆう撒散したようで、聞く耳、交す口に、この息も嘸ぞ臭かつたに相違ない、とほつとした、我がその息さえ腥い。むかつとして胸を圧えて、沓脱へ吐もどすように、庭下駄を採つた時は、さつき別亭へ導かれた縁の口に、渠一人、れた烏賊の燃ゆるのを樹の間に見つつ、頸筋、両脇に、冷い汗をびつしより流して、ぐつたりとしたのであった。

要するに、麗しき婦は塔婆の影である。席に見えないとすると、坊主、坊主が別亭へ侵入して、蚊帳を乱していはしないかと危んだためなのであった。

「どうかお聞き下さい。……お鬱陶しいでしょうが、お聞き下さい。——僕は洋画かきの、それもほんのペンキ屋ですが……」

積真三は、閨の塔婆に引添うて、おなじ枕頭にまくつた毛脛に、手がつかないばかりにして言った。——いまこの数寄屋へ入ると同時にハツと思つたのは、大坊主が古行燈の灯を銀の俵張の煙管にうつして、ぶかぶかと吹かしていた処、脂を吸ったか、舌打して、

ペツペツと憚らず蚊帳に唾を吐いた。ああ、その勢で行られては。……蚊帳を捲つて入る処へ、つかつかと上るのを、坊主は見返りもしなかった。

「何をなさるんです。」

「行力を顕わすのよ。」

それから、あらたまつて謙遜りつつ言つたのである。――

「私には、たいせつな先生があります。ただお若くつてなくなりましたが、それは世に有名な方です。その墓が青山にあるんです。去年あの震災のあとに、石碑が何うなつたらうと思つて、まあまあ、火にも、水にも、一息つけるように成ると、すぐに参りました。……ただもう一なだれです、立派な燈籠は碎けて転がる、石の鳥居は三つぐらいに折れて飛んでいる中ですから、口惜いが、石碑は台の上から、隣の墓へ俯向けに落ちて、橋に成つていたんです。――管理所を尋ねて、早速起し直すように頼みましたが、木で鼻をくくると言うのはその時の対応でした。――金に糸めさえお着けなさらなければ今日中にでも起します、尋常の御相談ですと、来年に成りますか、来々年に成りますか、そこは承合えません、墓どころじゃないでしょう、雨露を凌がないのがどのくらいあるか知れませんか、御華族方だつて、まだ手をつけちゃいませんと、取つてもつけない情なくもあるし、

癩しやくにも障さわりました。……大勢の弟子のうちから、地震に散ちぢらばらないのだけ、四五人誘さそ合あつて、ここに、麻繩あしな、鋤すき、セメントなどを用意して、シャツにズボンばかり、浴衣たすきに褌たすきがけの勢いきおいで推出おしだしたんです。が人の注意で、支度ばかりしましたものの、鋤もセメントも何う使つて石碑を起すんだか誰も知りません。——知合の墓地近くの花屋から、とに角、監督だけにと云つて、ほか仕事で忙しい石屋の親方を一人頼みました。この石屋が皆の意気込を買つてくれて、さし図どころか自分で深しんせつ切せつに手を添えてくれた時、皆で抱まわしに、隣の墓から、先生の墓所の前へ廻し込んで、一段、段だん石いしを上げるのに、石碑が欠けちやあ不可いけない、と言うと、素早い石屋が、構わねえで、バシリと半分はんぶんにへし折つて、敷いがかつた塔婆が一本、じき隣にはありません。一つ置いた墓地はかじなので。——尤も倒れたのを引出した事は知つていますが、……それが、この塔婆です。戒名は御婦人です。」

と、やや息せいて、ハンカチで汗を拭つて言った。

「故わづとらしいと思えますから、友だちの見ない間に、もとへ戻して、立掛けて、押んで挨拶をして、その日は済みました。——氣に成りますから、……ずっと十二月しわすまでおくれましたが、墓はかまいり詣まいりの時、茶屋で聞いて、塔婆のぬしの菩提寺がわかりました。その菩提寺が遠方です……遠方と云つて、……むきは違いますが、それがこの土地なんです。」

「虚構こしらえるぜ！」と冷笑わらった。大坊主はじろりと顔を見た。

「いや、拵こしらえ事では決してないのです。墓所にはまだ折れたのがそのままでありましたから、外ほかのと違ちがつて、そう言いつた事情わけで、犬にも猫にも汚いさせるのが可厭いやでしたから、俣はではるばると菩提寺へ持もつて来て、住職にわけを言いつて、新あらたに塔婆を一本古卒ふるそと塔婆の方は些い少さですが心づけをして、寺へ預ゆけて、往ゆかえり、日の短い時の事です。夜に入いつてから青山の墓へかわりのその新しいのを手向たむけたんです——（釈玉香信女。）——施主は小玉こだま氏です、——忘れもしません。……誓ちかつてそう云いつた因縁があるのですから、私に免まじて、何なうか、この塔婆は廻まらないで下さい。」

「廻まる。——廻まるとは何だ。」

「これは申過まぎました。何なうか、お触りに成ならないでおくんなさいまし。」

「触ふるよ、触ふる処ところか、抱かいて寝ねるんだ。何、玉香こぎよが、香かう玉ぎよくでも、女亡おんなむじやは大抵似寄おんむりだ、心配しなさんな。その女じやああるめえよ、——また、それだつて、構かわねえ。俺おれが済度して浮うばして遣やる。……な、昨今だが、満更知らねえ中じやねえから、こんなものでも触ふるなど頼たのめば、頼たのまれねえものでもねえが、……誰ただと思おもう、ただ人びとと違ちがうぜ。大根元教の大先達おほもとが百ものがたりの、はなれ屋の破行燈やれあんどうで、塔婆を抱かいて寝ねたと言いえば、

可^{おそろし}恐さを恐れぬ、不気味さにひるまない、行力法の功德として一代記にかき込まれるんだ。先^まず此^{こいつ}奴は見せ場じゃあねえか。」

「ですから、手をつけて頼むから。」

「頼まれねえ。ただ人とは違うよ。好色^{すき}からとばかりなら、みようだいを買った気で、一晩ぐらい我慢もしようが、俺のは宗旨だ、宗旨だよ。宗門がえをしろと言って誰^きが肯くやつがあるものか。昔のきりしたんばてれんでさえ、殺されたって宗門は変えなかつたぜ。」

「私の親類だと思つて。」

「不可^{いけね}え。」

「姉だと思つて。……妹だと思つて。」

「不可^{いけね}え!」

「じゃあ、己^{おれ}の家内なら何うするんだ。」

けしき
気色^{けしき}ばんだが、ものともしない。

「矢張^{やっぱ}り抱くのよ。」

「坊さん、——酔つてるな。」

「何を、……むしやくしやするから、台所へ掛合つて柀^{ます}で飲んだ、飲んだが、何うだ。会

費じやあねえぜ。二升や三升で酔うような行力じやねえ、酔やしねえが、な、見ねえ。…
 …玉ぎよくに白粉で、かもじと来ちやあ堪らねえ。あいよ、姐ねえさん。」

「止さないか。」

声をおさえて、真赤な木棍ねっこで、かもじをつついて、

「白粉に、玉と、この少し、蚊帳に映つて青白くつて、頬ほっぺた辺にびんの毛の乱れた工合よ。

玉たまに白粉と。…此奴こいつおいらんでいやあがる。今夜の連中にこのくらいなのは一人もねえ

。」

土蜘蛛つちぐもの這込はいこむ如く、大跨おおまたを蜿うねつてずると秋草の根に搦からんだ。

「野郎。」

かわす隙なく、横ぞつぽうへ、坊主の一棍を浴びながら、塔婆たつぱを颯さつと抜取つて、真三は蚊帳かたむすを蹴けた。——これが庭の方へ遁にげられると仔細さいしゆはなかつたのである。

小盾こたても見えず、姿見かたわらを傍かたわらに、追つて出る坊主から庇かばうのに、我を忘れて、帷子かたびらの片袖かたびらを引切りひっきぎまに、玉香を包み、信女おほを蔽おほうた。

「この野郎。」

ぬつくりと目さきに突立つ。

かかる時にも、片袖きれた不状ぶざうなるよりは……と思う、真三は、ツと諸もろ膚はだに払つて脱といだ。唯、姿見に映つた不思議は、わが膚のかくまで白く滑らかだつた覚えはない。見る見る乳もふつくりと滑らかに、色を変えた面おもてもさながらの女である。

この膚、この腕かひなに、そのトタンに、二撃三撃を激しく撲ぶたれた。撲れながら、姿見の裡うちなる、我にまがう婦おんなの顔にじつと見惚みとれて、乱れた髪の水に霽しずくするのさえ確しかと見た。やあ、朱塗の木棍ねっこは、白い膚を虐さいなみつつ、烏賊あざのれが臭においを放つて、また打つとともにムツと鼻をついた。

「無礼だ、奴ずくにゆう入道。」

真三の手が短刀に掛つた。

筆者は……実は、この時の会の発起人いちにんの一人であつた。敢あえて言を構うるのではないが、塔婆ねやの閨なやの議あずかには与あらない。

槓君は腕の骨を損じた。棍元教の先達は木棍を握つた手の指を落した。真三は殺すまでもないが、片手は斬落そうと思つたそうである。

二人は、まだ病院に居る。

怪我はこれだけでは済まなかつた。芳町辺の一むれが、幹事まじりに八九人、この大池の公園をめぐつて、しらしらあけに帰つたのが、池の彼方に、霧の空なる龍宮の如き御堂の棟を静な朝波の上に見つと行くと、水を隔てた此方の汀に少し下る処に、一疋倒れた獣があつた。蘆の穂が幽に、おなじように細い残月に野末に靡く。あたりの地は塵も留めず、掃き清めたような処に、その獣は死んでいた。

近づくと白斑の犬である。だらりと垂れた舌から、黒い血、いや、黒蛇を吐いたと思つて、声を立てたが、それは顛のまわりをかけて、まっすぐに小草に並んで、羽を休めたおはぐろ蜻蛉の群であつた。

こればかりでない。その池のまわりをしばらくして、橋を渡る、水門の、半ば沈んだ、横木の長いのに、流れかかる水の底が透くように、ああ、また黒蛇の大なのが、ずりりと一条。色をかえて、人あしの橋に乱るとともに、低く包んだ朝霧を浮いて、ひらひらと散つたのは、黒い羽にふわふわと皆その霧を被つた幾十百ともない、おびただし、おなじかねつけ蜻蛉であつた。

触つたもの。ただ見ただけでさえ女たちは、どツと煩らつた。

塔婆は幹事、発起人のうちで、楨君から、所をきいて、良圓寺と云うので心ばかりの供

養をした。縁類は皆遠く他国した。あわれ、塔婆のぬしは、仔細あって、この大池に投身したのだそうである。

——場所は、たいがい、井の頭いのかしらのような処だと思っただけいば可い。

（『女性』一九二四「大正一三」年一〇月号）

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」ちくま文庫、筑摩書房

2009（平成21）年7月10日第1刷発行

初出：「女性」

1924（大正13）年10月号

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露萩 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>